

【特色あるフロンティアスクールの取組事例】

都道府県番号	23
都道府県名	愛知県

()
 該当する観点にチェックをすること

・学校名及び規模

刈谷市立日高小学校										
	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊学級	計	教員数	
学級数	3	3	3	3	3	2	1	18	26	
児童数	87	94	84	83	83	71	4	506		

・実践研究の概要

・主題（テーマ）「できる喜び、わかる楽しさを味わわせる授業づくり」
 - 確かな学力をつける学習指導を求めて -

・テーマ設定の趣旨
 本校では、昨年度まで、学習指導要領の趣旨を先取りし、表現力の育成に重点を置いた総合的な学習の時間への研究を進めてきた。環境、福祉や国際理解などの魅力的なテーマや豊かな体験活動は、子供たちの追究意欲を高めるのに有効であった。子供たちは、追究の深まりと体験活動を通して感じたさまざまな思いを、自分の言葉で表現しようと積極的に取り組んだ。しかし、これらの取り組みを進める中で、私たちが痛切に感じたことは、基礎・基本の重要性であった。

表現意欲がどんなに高まったとしても、それを支える表現技術や基礎知識は、テーマの追究とは別の次元で身につけなければならない。学習の基礎・基本が不十分なままでは、育んできた大切な思いすら十分に伝えられないのである。

本年度、本校が文部科学省の学力向上フロンティアスクールの指定を受けたことを契機として、学力とは何か、学力をつけるためにはどうしたらよいかを考えるとところから、取り組みを始めることにした。

・実践研究の内容について

() 研究体制の工夫

どんなに素晴らしい指導体制をつくりあげたとして、最も重要なのは、一人一人の教師の授業である。学力向上の基本は、充実した授業づくりであるとの共通理解のもとに、愛知教育大学教授 志水 廣先生を講師としてお招きし、指導法についての研修を深めた。全体会での指導のもとに、2回に分けて全職員の授業を見て診断していただき、指導を受ける機会を設けた。長所の伸ばし方、短所の改善方法について、個別に指導していただき、それぞれの課題克服に向け、現在も取り組みを進めているところである。

学力向上フロンティアスクールは、ある意味で先例のない研究である。4月以来、歩きなが

ら考え、ふと立ち止まって振り返り、修正しながら進めてきた。新しい試みには、実際に取り組んでみなければ見えないこと、気がつかないことがある。実践を大切しながら研究を進めてきた1年であった。

() 実践研究の内容

1 個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫改善

- 少人数指導を生かした習熟度別学習への取り組み -

算数では、下の表のように、全学年でTT・少人数授業に取り組んだ。

学 年	形 式	方 法 等
1年	TT (ティームティーチング)	各教室で TT を実施
2年	TT or 少人数指導 (学年解体)	1 学期当初は TT。次第に少人数指導へ
3年～5年	少人数指導 (学年解体)	少人数指導、習熟度別
6年	少人数指導 (学級解体)	単元ごとに児童がコースを選択

- ・ 1年生は、学級集団と学習集団を区別することが難しいので、各教室でTTを実施。
- ・ 2年生は、当初はTT形式で実施し、徐々に少人数指導へ移行していく。
- ・ 3年生～5年生は、3C(クラス)4T(教師)による少人数指導を基本とする。
- ・ 6年生は、学級を二つに分けた(1C2T)少人数指導を基本として取り組んでいる。

私たちは、学級を2つに分割し、人数を減らすだけの少人数指導は、メリットよりもデメリットの方が大きいと考えた。本校の場合、6年生だけが1学級37人で、5年生以下は、ほとんどが30人以下のいわゆる少人数規模の学級である。ところが、これらの30人以下の学級と40人近い人数の6年生の学力を比較したところ、顕著な差は見られなかった。人数さえ減らせれば学力が向上するというわけではないことをすでに実証しているのである。

また、私たちは、学級を分割することによって、担任だからこそできる、心の通う温かな支援やきめ細かな指導というよさが失われる上に、人数が少なくなってもなお存在し続ける個人差への対応の難しさや、分割したために起こる評価の煩雑さなどが残ると考えた。

それに対して、習熟度別少人数授業は、習熟の程度に応じた学習集団を構成することで、学習集団内での習熟の差が小さくなり、より一層、個を生かし、個に応じた授業が可能になると考えられる。

平均レベルの子供を主体に授業が進められていくがゆえに、算数の得意な子が授業の後半で足踏みを強いられ、苦手な子が理解できないままにされるような授業では、子供たちの学習意欲が高まるとは考えられない。どの子にも1時間の「わかる授業」を保証したい。そして、それが「学ぶ楽しさ」の基本であると考えたのである。

2 実施までのあゆみ

習熟度別授業を実施するにあたっては、保護者の理解が欠かせない。習熟度別授業の善し悪しを、うわさやマスコミからでなく、目の前の子供たちの心の状態や学習に取り組む姿から判断してほしいと願って、説明会を実施した。そこでは、習熟度別授業は、子供たちの個性に応じ、個を伸ばすことをねらった学習指導であること、子供たち自身の希望によってコース分けをすること、どのコースに入っても、教科書の内容は網羅していくこと等を説明し、理解を求めた。

また、授業参観では、習熟度別の授業を積極的に公開し、子供たちの姿を見てもらった。

3 習熟度別のクラス編制

本校の習熟度は、その単元に入る前のレディネスを中心としてとらえている。つまり、その単元の前の学習に、「慣れて十分会得しているかどうか」を習熟度としている。それに加えて、子供たちの学習スピードや関連単元への理解度、興味・関心などを考慮している。

習熟度別授業に子供たちが意欲的に取り組み、また、差別意識や優越感を抱かせないためには、子供たち自身が、自分の意志で習熟度別のコースを選ぶことが必要である。また、習熟の程度は、単元や教材によっても違ってくるはずである。そこで、本校では、習熟度別のコースを単元ごとに子供自身が選ぶことを基本にした。

4 子供自身によるコースの選択

習熟度別少人数指導を有効に行うためには、子供たち自身が自分の習熟度にあったコースを選択できることが重要である。保護者の理解を得るためにも、教師による子供の選別ととられるような方法は、とるべきではない。また、子供たち自身の選択を尊重することは、学習意欲を低下させないための手だてともなる。

子供たちが自分にあったコースを適切に選択できるようにするため、次のような流れを考えた。

オリエンテーション授業

単元の最初に30分間、その単元の導入の授業をする。

レディネステスト

オリエンテーションの最後に小テスト(5分間)を行う。テストの内容は、単元に入る前のレディネスとオリエンテーション授業の理解度を問う内容を組み合わせたものとする。

実施後、その場で自己採点させる。

コースガイド

その単元の学習が、それぞれのコースでどのように進められるかが概観できるコースガイドを作成し、子供に配布する。

コース選択

の学習の理解度、のレディネステストの結果、のコースガイドの内容を参考にして、その場で子供自身がコースを選択する。

希望が偏った場合も、人数調整等は行わない。どうしても授業が成立しないような人数になってしまった場合は、習熟度のより高いコースでがんばってみることを勧めることで、解決を図っている。

5 習熟度別コースと指導計画

習熟度に応じたコースを、子供たちのコース選択能力とも考え合わせて、3年生までは「ゆっくりコース」と「しっかりコース」の2つ、4年生以上は「はりきりコース」を加え、3つとしている。

子供の実態や単元の内容をもとに、次のような原則で3つのコースの学習内容、学習過程等の指導計画を作成している。

ゆっくりコース

- ・レディネスが不十分な子供が多いので復習の時間を確保する。
- ・「できるようになる」ことを最優先し、わかることは目標としてとらえる。教材、場面によっては、反復練習を重視する。
- ・教科書の内容には、ひとつとおり触れさせるように工夫する。

しっかりコース

- ・教科書の内容に沿った授業を展開する。
- ・「わかる」ことを重視しながら、授業を進める。

はりきりコース

- ・「自分たちの力でわかる」ことを重視する。
- ・上学年の内容に踏み込まない範囲で、発展的な学習に挑戦していく。

6 学生チューターの導入

習熟度別少人数指導をより効果的に実施するためには、個々の子供たちに寄り添い、それぞれの抱えているつまずきに応えながら学習を進めていく必要がある。現有教員だけでは難しいこれらの課題を、地域の協力を得て解決していくことを考えた。

幸い本校の近くには、愛知教育大学、中京女子大学があり、それぞれ教員養成課程をもっている。学生たちの中には、子供たちとの交流を通して、教育や子供への理解を深めたいと考えている学生もいるに違いないと考え、両大学へボランティア募集をした。子供たちにとって、若い学生は、それだけでも魅力的である。お兄さん、お姉さんの気安さで、気軽に質問を受けたり、個別に解説をしたりしている。

授業の前には、当日の授業内容の簡単な打ち合わせを行い、特にサポートをお願いする子供

を指定することもある。授業の後には、サポートしてもらった個々の子供に対する情報を口頭や簡単なメモで伝えてもらっている

() 成果と課題

1 習熟度別少人数授業が定着し、そのよさが見えてきた。

(1) 子供たちが、自分にあったコースを選択できるようになった

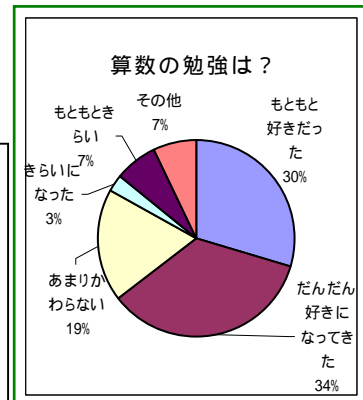
最初は、レディネステストの結果や自分の習熟度に応じたコースを選べなかった子供たちも、毎授業ごとの振り返りカードへの記入や習熟度別の授業を繰り返し経験することで、より適切な選択ができるようになってきた。

5年生の最初の単元では、16問中8問以下の正解にもかかわらずはりきりコースを選択する子供たちが10人以上もいたが、分数の単元では、14問中7問以下の正解ではりきりコースを選んだ子供は、一人もいなかった。このことから、自分にあったコースを選択できる子供が育っていることが分かる。

(2) 習熟度別の授業は、子供たちの学習意欲を高めた

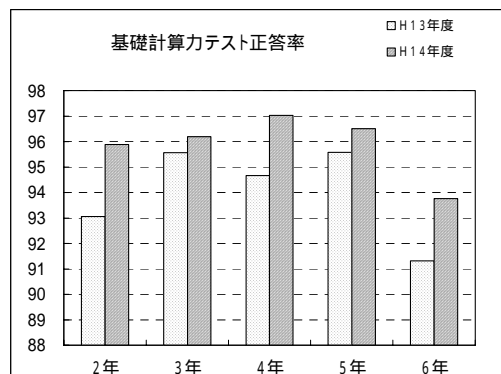
子供たちへのアンケートは、右のグラフのように70%が好きになったと回答している。また、振り返りカードの反省にも、次のような感想がたくさん見られた。

- ・いつも楽しくて、わからないとき、すぐに教えてくれてよかったです。
- ・算数の勉強、去年よりずーっとわかりやすかったです。
- ・勉強しやすくて、なおかつ楽しかった。ぼくは、ちょっと算数が苦手だったけど、だいたいできるようになってきた。このコースを選んでよかった。
- ・ゆっくりコースは、楽しいし、わかりやすかったです。



(3) 子供たちの学力が向上した

右のグラフは、各学年の子供たちの本年度1学期末と平成13年度末当時のそれぞれの平均正答率を比較したものである。どの学年も、わずか数ヶ月の間に、正答率が着実に伸びていることがわかる。



また、平成13年度末の基礎計算力テストの正答率が80%以下の子供たちは、現在の2年生～6年生に22名いた。全校の平均正答率が95%に迫るテストでの80%以下は、かなり計算を苦手としている子供たちである。これらの子供たちを追跡調査したところ、22人中19人が正答率を伸ばしていた。また22名の平成13年度末の平均正答率は61%であったが、平成14年度は72.6%に伸びていた。苦手な子も力をつけていることを示している。

(4) 保護者・子供の理解が進んだ

「自分の選んだコースで勉強する今年の算数の授業と学級全体で勉強する授業とでは、どちらが勉強しやすいですか。」(児童対象)

自分の選んだコース 66%
学級全体 21%
あまり、かわらない 13%

「習熟度別学習について、どう思いますか」(保護者対象)

よいと思う、88%
あまり好きくないと思う、8%
特に何も思わない、4%

コースがよい理由

人数が少なくて勉強しやすい
質問や疑問がしやすい
進みや勉強の仕方が自分にあっていて
勉強がよくわかる
その他

習熟度別学習がよいと思う理由

子供が、楽しんで勉強している
子供の力を、どんどん伸ばすことができそうなので
子供の分りやすいペースで学習を進めてくれるので
その他

この結果は、その適切な方法と良さを明確に示すことができれば、習熟度別に分けることも十分理解が得られることを示している。

また、習熟度別少人数授業を実践してみて、もっとも強く感じることは、習熟の低い子供たち、算数の苦手な子供たちが、実に生き生きと学習に取り組んでいるということだ。算数の時間になると、学習用具を両手に抱え、楽しそうに自分の教室に移動していく子供たちの姿は、予想を超える収穫であった。

習熟度別授業は、子供たちの学力の差を拡大するものであるとの指摘がある。もちろん、もともと習熟の高い子供たちをさらに伸ばしていくという意味では、差の拡大はあるだろう。しかし、それは、習熟の十分でない子供たちを放置しておくことでは、決してない。しかも、学力の差は拡大するかもしれないが、心の差、つまり算数が好きで意欲的に取り組もうとする心の差は、確実に縮まって来ていると感じている。

2 今後の課題

理解の十分でない子のための補充的な学習のあり方、十分理解できている子のための発展的な学習について、よりよいものを開発していく必要がある。

学習指導要領で示されている最低限度の学力をより確実に定着させるためには、習熟度別のコースごとの評価規準を一層明確にしていく必要がある。

まだまだ研究は、歩み始めたばかりであり、習熟度別少人数授業を継続していくことで、子供たちの姿はこれからどのように変わっていくのだろうか。楽しみでもあるが不安もある。子供たちのできるようになりたい、わかりたいという気持ちに応えるために、より一層研究を深めていく決意である。

() 成果の普及方策

1 授業公開の開催

(1) 日時 平成14年10月15日(火)午後13時～16時30分

(2) 内容 習熟度別少人数授業(1年～5年の算数の授業)の公開
チャレンジタイムの公開
本校の取り組みについての発表
講演「学力を伸ばす授業づくり」 愛知教育大学教授 志水 廣先生

(3) 参加者 312名

刈谷市	西三河	その他県内	県外	学生	その他
118	88	65	21	12	8

(4) 参加者アンケートより 「何に興味をもって参加されましたか」

教科/ボランティア	習熟度別授業	チャレンジタイム	通知票	学生ボランティア	授業診断	志水先生の講演
33	81	13	7	18	5	38

2 ホームページでの情報提供

(1) アドレス <http://www.city.kariya.aichi.jp/school/hidakas/>

(2) 内容 本校の取り組み、授業公開案内、授業公開参加申し込み受付

3 資料提供

広島県沼隈郡沼隈町立千年小学校

滋賀県高島郡安曇川町立安曇川小学校

埼玉県教育局北部教育事務所

静岡市立大里東小学校

京都府久世郡久御山町立佐山小学校

豊田市立平井小学校

西尾市立矢田小学校

幡豆郡一色町立一色中部小学校

安城市立高棚小学校

刈谷市立双葉小学校

刈谷市立住吉小学校

4 学校参観受け入れ

7月8日(月) 豊田市竹村小学校他(4名)

10月31日(木) 静岡市立大里東小学校(1名)

11月25日(水) 名古屋市立白鳥小学校(1名)

12月12日(木) 東京都東久留米市校長会(4名) 長野県岡谷市立上の原小学校(1名)

- 1月30日(木)文部科学省(1名他)
- 2月4日(火)京都府乙訓教育局(9名)
- 2月10日(月)岐阜県美濃市校長会(13名)

5 その他

- 7月13日(土)朝日新聞掲載
- 10月13日(日)中日新聞掲載
- 11月25日(月)ケーブルテレビの取材(放映12月9日~15日)
- 12月20日(金)長野県伊那地区協議会に参加し、研究の概要を発表

() その他

1 チャレンジタイムの実施

(1) ねらい

計算力は、反復練習が欠かせない。また、問題解決的な学習を進めるためには、正しく速く計算できることは重要な要素でもある。これらの技能は、問題解決的な学習や諸活動の中で身につけることは難しく、教師の意図的な指導や場の設定の中で「習熟」と考える。また、これらの内容は、どの子にも「習得・習熟」できるものとする。また、継続的な取り組みを工夫することで、すべての子供に、「やればできる」という達成感を味わわせ、意欲を高めることができる。また、習得した技能は、問題解決的な学習・諸活動の中で繰り返し使用することで、さらに「強化」することができると思う。

(2) 実施方法

授業後(帰りの会の前)10分間を「チャレンジタイム」とし、全校で毎日実施している。10分間の進め方は、学年の発達段階や学級の子供たちの実態により、多少の差はあるが、原則として次のような手順で行っている。

各自でプリントに取り組む。(5分) 担任は、2~3名の個別指導

答え合わせ(2分)

間違えた問題に再チャレンジする(2分)

プリントの整理(ファイルにとじる)と、カードへの記入

(3) 習熟の違いに応じる問題づくりと進め方

どの子にも、挑戦する楽しさと感じる喜びを感じさせたいと願って、次のような方法で取り組んでいる。現在のところ、1週間を単位として考え、プリントを用意している。

1~3年生 ・毎日、全員が同じプリントに取り組む。

・5日間で少しずつ難易度を上げていく。

4~6年生 ・1日目から5日目まで、少しずつ難易度が上がるプリントを用意する。

・2日目からは、前日の結果をもとに、取り組むプリントを自分で決める。

(4) 挑戦カードの利用

間違い直しが終わった後、各自カードに間違えた数を書き込んだり、色ぬりをしたりする。子供たちは、カードを見直すことで、自分がどの程度理解できているのか振り返ることができる。また、どんどん増えていく合格の色ぬりは、成長の喜びを自覚させることにもなる。担任にとっても、子供の取り組みの様子を把握する助けとなる。

2 通知票の見直し

単元ごとに習熟度別のコースを編制するため、絶対評価の導入と合わせ、従来の通知票を見直した。評価規準をもとに、単元ごとの観点別評価を蓄積し、保護者にも、単元ごとの評価を知らせるようにした。また、できるだけ早く子供の学習状況を保護者に伝え、家庭での学習の参考にしていただくことをねらって、5月末、7月末、10月末、12月末、3月末と1年間に5回発行している。

学校から保護者への一方的な通知という性格を改め、学校(担任)と保護者が相互にコミュニケーションすることをねらって、名称も従来の「通知票」から「のびゆく日高っ子」と変更し、A4のクリアファイル形式とした。学校からのアドバイスに対する家庭からの声を取り入れながら、個々の子供の達成状況に応じた方策を講じている。